

令和6年度日本大学工学部における教育活動に関する
外部評価実施報告について

工学部内部質保証推進委員会
工学部自己点検・評価委員会

1 実施目的

卒業・修了の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者の受け入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）の3つのポリシー及びこれらに対する取組の適切性・妥当性等に対する外部評価を行い、本学部における教育活動のPDCAサイクルを確立し、教育の質保証及び向上に資することを目的とする。

2 外部評価者

- 委員長 岸井 隆幸（日本大学名誉教授）
委員 高橋 伸行（船橋市教育委員会生涯学習部長）
委員 加藤 史子（WAmazing 株式会社代表取締役CEO）
委員 中島 佑実（横浜市立東高等学校教諭）
委員 飯田 眞（飯田エンジニアリング社）

3 外部評価項目及び方法

① 評価項目【工学部及び大学院理工学研究科】

- （1）教育・学習（教育課程・学習成果）〈ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー〉
- （2）学生の受け入れ〈アドミッション・ポリシー〉
- （3）学生支援
- （4）社会連携・社会貢献

② 評価方法

- （1）「令和6年度全学自己点検・評価報告書」及び「令和5年度外部評価結果を受けての改善取組状況報告書」を作成し、外部評価者へ提出する。
- （2）外部評価者による評価は上述（1）で提出した内容をもとにして行い、協議会を開催した上で評価を行う。
- （3）外部評価者は、評価の結果、優れている点や改善を必要とする点等を評価結果としてまとめるとともに、外部評価項目の取組評価を4段階で評価する。
（A：十分出来ている、B：概ね出来ている、C：一部改善が必要、D：出来ていない）

4 外部評価実施スケジュール

- 令和6年7月 外部評価実施方法を決定
令和6年11月 外部評価者へ本学部の自己点検・評価結果をまとめた資料を送付
令和6年12月 本学部駿河台校舎にて協議会を開催の上、外部評価者から評価結果提出

5 外部評価協議会の議事録及び外部評価結果について

別紙「外部評価協議会議事録」及び「外部評価結果」のとおり

以上

令和6年度日本大学理工学部における教育活動に関する
外部評価協議会議事録（要旨）

1 開催日時 令和6年12月19日（木）午後2時30分～午後4時40分

2 開催場所 駿河台校舎10号館特別会議室

3 出席者

【外部評価者】

委員長 岸井 隆幸（日本大学名誉教授）
委員 加藤 史子（WAmazing株式会社代表取締役CEO）
委員 中島 佑実（横浜市立東高等学校教諭）
委員 飯田 眞（飯田エンジニアリング社）

【本学部】

轟 朝幸（理工学部長・内部質保証推進委員会委員長）
木村 元昭（理工学部（駿河台校舎）次長）
居駒 知樹（理工学部（船橋校舎）次長）
宮里 直也（学務委員会委員長）
大月 穰（大学院委員会委員長）
藤井紫麻見（学生生活委員会委員長）
渡部 政行（入学試験実行委員会委員長）
大沢 昌玄（自己点検・評価委員会委員長）
後藤 英次（教務課長）
森 大樹（学生課長）
牧野 宏司（庶務課長）
矢葺 未来（庶務課主任）

※外部評価者 高橋伸行（船橋市教育委員会生涯学習部長）委員は当日公務の都合により欠席となったが、12月27日（金）に本学部の取組について個別で説明を行い、質疑応答の上、意見を聴取した。本議事録には同内容についても記載を行っている。

4 内容

轟理工学部長より挨拶の後、大沢自己点検・評価委員会委員長から今回評価いただく項目や意見をいただきたい観点等の説明を行い、公益財団法人大学基準協会が定める大学基準の「基準4 教育学習（教育課程・学習成果）」、「基準5 学生の受け入れ」、「基準7 学生支援」及び「基準9 社会連携・社会貢献」の各項目について説明を行った。

【説明者】

後藤教務課長 「基準4 教育学習（教育課程・学習成果）」、「基準5 学生の受け入れ」
森学生課長 「基準7 学生支援」
居駒学部次長 「基準9 社会連携・社会貢献」

<意見・要望事項>

【教育学習（教育課程・学習成果）】

- ・18歳人口が減少している中で入学者選抜は厳格な評価基準に基づき実施することにより、学生の質を確保するとともに、入学後に補充教育等を行うパワーアップセンタ

- 一の制度を活用して引き続き教育の質を高めてほしい。ただし、パワーアップセンターはあることは知っているが、どういったことが取り組まれているか、対象者は誰なのか等が学生に必ずしも伝わっていない状況のため、理工学部として積極的に利用を呼びかける等の取り組みを行うことにより、教育の底上げにつなげていただきたい。
- 成績評価基準は絶対評価となっているが、しっかりと成績を厳格に評価するというのは大切なことのため、一定の基準で成績を区切る相対評価があっても良いのではないか。「下位20%は単位を落とす」という勇気が教員側にも必要となる。
 - 「リベラルアーツ」についてはカリキュラム編成の検討を行うことを望む。「リベラルアーツ」は、専門知識を他分野と関連付けて考え、社会で活躍するための基礎的な力となるので大切である。理工学部におけるリベラルアーツを検討していただきたい。昔と今の一般教養は変化してきている。昔は医学を志すものにとってドイツ語は必要だったかもしれないが、現代はそうではない。そのように学生の興味関心や志す道とそれに紐づく一般教養は現代では生成AIツールかもしれない、そういった一貫性における再編が必要と思われる。
 - 教養科目と専門科目の関係において、例えば数学、ICT、プログラミング、CAD等は学科を問わず基礎的な能力として求められており、特にこれからは生成AIに対する知識の重要性が増しており、この点はしっかり対応していく必要がある。
 - 教育の質保証が求められているため致し方ないが、大学では学生自身が自由に考えたり、学べるのが大事だと考える。昔と違いカリキュラムである程度履修すべき科目が決まっており、高校までの教育とあまり変わらないのではないかという印象を受けた。型にはめる教育ではなく、自主性を育む教育が求められている。
 - 教養教育科目内に「多文化と社会の理解」(I群)を設置しているが、設置授業をみると「多文化」というより「多言語」の内容となっている。現代は、多文化理解が求められているため、言語だけではなく、一つ踏み込んだ内容を展開することが望まれる。

【学生の受け入れ】

- 入学志願者について、18歳人口は18年前に予測でき、今後も減少が見込まれていることから、一定の入学試験合格者倍率を保つ、あるいは向上させて理工学部のレベルを高めるために、学部学科の統廃合も含めて検討し間口を狭めるか、外国人留学生等の入学を促進するか等を検討する必要がある。
- 現在、18歳人口が減少しており、理工系を希望する学生も減っていることもあり、女子学生を増やすことが重要である。理工学部としても女子学生を増やす取組を行っていると思うが、それが伝わっていないのでより一層取り組んでいただきたい。
- 過去の入学試験問題については必ずしも公開する必要はなく、理工学部のアドミッション・ポリシーに基づき入学者選抜を行うことが重要であり、「大学としてどのような学生に入ってきてもらいたいのか?」、「そのためにどのような入学試験の在り方があればいいのか?」そこが本質的に大切であると考えます。
- 令和5年度外部評価結果を受けての改善取組状況報告書では、理工学研究科について社会人の学生を積極的に受け入れるよう検討するとあるが、具体的な数値等がない。理工学研究科としてしっかりと取り組んでいくとのことであれば具体的な検討スケジュールを策定するとともに、学生にとってどのような価値があるのかを伝えていくことが大事である。現在は、社会人になってから改めて学び直すというのは大いにあり得る時代なのでしっかりと検討いただきたい。
- 理工学研究科の社会人学生の増加に向けた取り組みは、働いていても学べるよう柔軟な教育研究環境を整備することが重要である。また、研究課題等を提示して企業の研修制度等と連携させる仕組みを構築出来れば、互いにメリットがあるのではないか。

【学生支援】

- ・学生・保護者・社会から信頼され、安心して入学できる大学となるよう理工学部で取り組んでいる活動等の情報発信を積極的に行っていただきたい。
- ・「学生支援」におけるキャリア支援について、理工学部でも1年次に大学の学びを考えるキャリアデザインがあるが、大学入学直後の対応がやはり肝心だと感じる。大学入学時に「卒業時に自分はどうなっていきたいのか？」という目標を決め、大学4年間をどのように過ごすかということをも最初にインプットすることが重要である。
- ・「学生支援」における経済的支援について、理工学部でも行っているが、日本は相対的にどんどん貧しくなっており、学びたい者が学べない、学ぶためにアルバイトをしなければならないという状況は非常に問題だと感じている。経済的支援は本来、国の仕事と考えられるが、将来卒業して社会に貢献でき、活躍できる若い人たちに理工学部の経済的支援の取組を浸透させるためにどのように周知するかが重要である。
- ・駿河台校舎は都市型のキャンパスのため、多岐にわたる学生カウンセリングの面談場所の確保に苦勞しているとのことであるが、学生カウンセリングは非常に重要な取組となるため、カウンセリングの需要に対応できるよう学外施設の利用、病院と連携する等も含めて取り組んでいただきたい。
- ・留学生の日常的な支援については、大学内の組織的な支援だけでは限界があるため、地域で設立している国際交流協会と連携を行うことで手厚いサポートを行うことができ、同連携はその後の地域定住化にもつながり、地域連携にもつながる。
- ・新入生に向けてのコンプライアンス教育は重要である。卒業後、社会人にはそのような素養は必須になるため、在学中においても同取組を行うことが必要不可欠である。

【社会連携・社会貢献】

- ・大学における社会貢献の最たるものは、未来の社会に貢献する人物を育て上げることと考えられ、そこに対して一本筋が通っていることが大事である。ボランティアを行う際は、学生自身の興味と学ぶ専門性の延長線上にある社会貢献に関するボランティア等を促進していくことも大事であり、これがリベラルアーツにもつながる。
- ・地域連携、社会貢献活動は多く取り組んでいるが、災害・事故等発生時は必ず課題等が多くあるため、研究課題にもつながり、その危機に対する対応は社会貢献にもなる。理工学部も日本大学災害研究ソサイエティ等の取組を行っているが、社会へ伝わっていない。今後は、より総合大学としての本学の強みを生かして取り組むとともに、社会へ積極的にアピールを行っていただきたい。
- ・令和6年10月に理工学部船橋校舎で開催された「次世代工学・研究シーズ交流会～日大から発信する次世代工学～（共催：三井住友銀行/日本大学）」は社会から研究課題をもらい、それをフィードバックするというサイクルになっており、非常に良い取り組みと感じた。
- ・千葉県船橋市は友好都市が3都市あるが、その1つは中華人民共和国の西安市である。理工学部の海外学術交流提携校先には同市にある「西安建築科技大学」及び「西安理工大学」があるので、互いに連携することにより、国際交流を強化することが期待できる。

【全体】

- ①外部評価協議会の運営方法について、理工学部としてのビジョンを示していただき、同ビジョンの達成に向けて感じている課題や意見が欲しい点を最初に提示いただいた上で、現状説明を行っていただきたい。

<意見・要望事項に対する本学部の回答>

【教育・学習（教育課程・学習成果）】、【学生の受け入れ】

- ・本学は「自主創造」を教育理念として定めており、同理念を踏まえ、理工学部・理工学研究科にそれぞれ「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」、「卒業の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」、「入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）」を定めているが、ただこれだけでは堅く、学生へ伝わるようにかみ砕いていく必要があるとも考えている。このような点を踏まえて、社会へどのような学生を育てたいか発信したい。
- ・「リベラルアーツ」及び「教養科目」についても御意見をいただきましたとおり、大変重要なことと捉えている。令和8年度にカリキュラム改定を予定しており、その機会に反映出来るように学務委員会において検討を行うように考えている。
- ・社会人学生及び外国人留学生の受け入れ等に関する検討については現在本学全体で検討しているデータ等を用いて分析を行い、各施策等を展開していこうと模索している状況のため、現時点では具体的な計画をお示しできていない状況である。

【学生支援】、【社会連携・社会貢献】

- ・本学の競技スポーツ部の一連の不正事案は理工学部と直接関係するものではないが、学生が不安なく安心して充実した学生生活を送り、そして卒業後、社会的にも活躍している姿を広く示せるよう理工学部として引き続き危機感を持って対応していく。
- ・ボランティア活動については学生自身の興味と学ぶ専門性の延長線上にある社会貢献に関するボランティア等（学習支援ボランティア、地域イベント参加等）も行っているが、本取組も社会へ浸透できていないので、発信方法を検討する必要がある。
- ・学生のカウンセリングについては、メンタル・障がい等に係る要因に基づき、合理的配慮を求める学生が増えており、相談件数は数年前と比較して1.5倍程度となっている。学生相談体制としては平日に専門カウンセラーを配置しているが、予約枠が早々に埋まっている状況である。このような状況のため、学生相談体制として、部屋を増やす、カウンセラーを増やす、適切な支援をサポートするコーディネーターを効果的に活用する等どのように対応していくのが課題となっている。

【全体】

- ・御意見等をいただきました内容について、女子学生を増やすための取組、社会要請に基づく研究活動、「パワーアップセンター」をはじめとした教育支援等各取組を行っているが、うまく周知出来ていない。本日は時間の都合上、各取組について説明を割愛させていただいたが、改めて、今度しっかりとその関係性も含めて御説明をさせていただくとともに、発信方法の改善に努めたい。
- ・また、本学部として将来のあるべき姿を定めることは重要と認識しており、若手教職員が集まり10年後の本学部について議論を行い始めている。将来のあるべき姿に向けて、必要な教育プログラム・組織・制度を現在思案しているところである。
- ・時間の都合上、全ての御意見に対して回答できなかったが、本当に貴重な御意見をいただいたので、これらを踏まえてしっかりと改善に努めていきたいと考えている。

木村学部次長から、本協議会でいただいた御意見及び外部評価者の皆様から御提出いただいた評価結果を踏まえ、今後本学部の教育活動の向上・改善に向けて取り組んでいくことを申し上げ、閉会となった。

以 上

令和6年度日本大学工学部における
教育活動に関する外部評価 評価結果

外部評価者 岸井隆幸・加藤史子・中島佑実・飯田眞・高橋伸行

[基準4] 教育・学習（教育課程・学習成果）

【評価項目】

- ① 達成すべき学習成果を明確にし、教育・学習の基本的な在り方を示していること。
- ② 学習成果の達成につながるよう各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していること。
- ③ 課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な授業形態、方法をとっていること。また、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導や支援を十分に行っていること。
- ④ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っていること。
- ⑤ 卒業の認定に関する方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。
- ⑥ 教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

① 評価できる点（伸長すべき点、取組が効果を上げている事項など）

- ・カリキュラムポリシーが明確であり、学位課程にふさわしい授業科目が設定されている点は評価できる。また、教育課程は定期的に適切な見直しを行い、改善していく姿勢が伺える。
- ・補充教育等の学習支援を行うパワーアップセンターは教育のフォロー体制として素晴らしい制度と評価できる。今後はより一層受講が必要と思われる学生に有効活用されるために運用及び周知方法の改善が重要である。
- ・授業改善のためのアンケートは、学生が感じている不満等、直接は言いづらいことも気軽に回答ができ、アンケート結果が改善につながり有効に活用されている点は評価できる。

② 問題点・今後の課題（改善すべき点、強化が望まれる事項など）

- ・各学科それぞれで実施されている ICT 教育については、基本ソフトの教育、プログラミングの基礎、生成 AI の取り扱い方など共通の部分も多いと考えられるので、学部全体で俯瞰的に整理して一般教養教育とも連携してカリキュラム編成等が進められることが望ましい。
- ・大学としての自由さや学生が自ら考え行動する力を削いでいるのではないかと感じるプログラムや単位修得制限などが見受けられ、見直しが図られても良いのではないかと感じる。
- ・教養教育科目「多文化と社会の理解」に関しては、多文化の部分が外国語科目のみであり、多文化の理解としては浅い部分があるのでより深い内容になることが望ましい。
- ・日本大学教育憲章の『『自主創造』の3つの構成要素及びその能力』内に定める「世界の現状を理解し説明する力」というのは目標としては低いのではないかと感じる。社会では、英語力や世界基準の思考力が求められるので、TOEIC の点数を卒業基準に追加、交換留学制度の積極的な活用等も検討する必要があるのではないかと感じる。
- ・成績評価基準は絶対評価となっているが、成績は厳格に評価するという点で大切なため、一定の基準で成績を区切る相対評価があっても良いのではないかと感じる。

③報告書の記載内容に対する評価，コメント		ABCD 評価(※)
	・点検・評価項目ごとに現状を記載しているか。その内容は具体的か。	A
	・記述内容は適格かつ簡潔に記載されているか。冗長な文章となっていないか。	A
	・誤字や脱字，わかりにくい表現はないか。	A
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・自己点検・評価報告書内に評価項目の内容が的確に整理されており，各学科の記載内容に問題があるわけではないが，学部全体を俯瞰した点検も必要があるのではないか。 ・自己点検・評価報告書は簡潔にまとめられているが，グローバル経済で勝負できる教育としての対応を伸ばしていただきたい。 	

※ A：十分出来ている，B：概ね出来ている，C：一部改善が必要，D：出来ていない

[基準5] 学生の受け入れ

【評価項目】

- ① 入学者の受け入れに関する方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公平、公正に実施していること。
- ② 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理していること。
- ③ 学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

①評価できる点（伸長すべき点、取組が効果を上げている事項など）
<ul style="list-style-type: none"> ・入学者選抜は様々な方式で実施され、また受験会場は地方試験場がある等、入学者選抜制度が充実している点は評価できる。 ・大学受験対象となる学生総数が減少気味かつ日本大学に関する様々な話題が飛び交った中で、常に学部定員を確保し、一定数の学生受け入れを実現していることに関しては努力の成果（オープンキャンパス等を通して、理工学部の充実した教育研究、卒業生の社会での活躍等をアピールできている）と評価できる。

②問題点・今後の課題（改善すべき点、強化が望まれる事項など）
<ul style="list-style-type: none"> ・入学志願者について、18歳人口は18年前に予測でき、今後も減少が見込まれていることから、一定の入学試験合格者倍率を保つ、あるいは向上させて理工学部のレベルを高めるために、学部学科の統廃合も含めて検討し間口を狭めるか、外国人留学生等の入学を促進するか等を検討する必要がある。 ・外国人留学生の受け入れについては、より積極的に取り組むとするなら指導態勢・支援体制のより一層の強化（学内だけではなく、地域の国際交流協会やNPOなどと連携してサポート等）を図る必要があると思われる。 ・大学院博士後期課程の定員未充足は各大学でも課題となっているが、定員充足に向けた取組としては、まずは学部生の時から大学院への進学の意味やメリット等を学内でアプローチすることが重要ではないか。その上で、学外から志願者を確保することになるが、大学院入試情報がホームページ上で探しにくく、学外からの募集に積極的とは感じられないため、改善が望まれる。また、社会人の受け入れに力を注ぐとのことであれば、しっかりと現状を把握して、企業などと連携することも模索しながら、より積極的な働きかけを行うことが望まれる。

③報告書の記載内容に対する評価、コメント	ABCD 評価(※)
・点検・評価項目ごとに現状を記載しているか。その内容は具体的か。	A
・記述内容は適格かつ簡潔に記載されているか。冗長な文章となっていないか。	A
・誤字や脱字、わかりにくい表現はないか。	A

コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・過去の入学試験問題については必ずしも公開する必要はなく，理工学部のアドミッション・ポリシーに基づき入学者選抜を行うことが重要であり，「大学としてどのような学生に入ってきてもらいたいのか？」，「そのためにどのような入学試験の在り方があればいいのか？」そこが本質的に大切であると考える。 ・入学者選抜の選考に関しては，公立校ではないので公平性はそこまで重要視せず，透明性を確保した上で，特色ある選考を行っても良いのではないかと考える。 ・大学入学後は，学力よりもやる気のある学生が伸びる傾向を感じており，その「やる気」が測れる入学者選抜が実現できると良いのではないかと考える。 ・社会人の大学院生など，特徴ある学生の受け入れを実現していることをアピールすることが望まれる。
------	--

※ A：十分出来ている，B：概ね出来ている，C：一部改善が必要，D：出来ていない

[基準7] 学生支援

【評価項目】

- ① 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制を整備し、適切に実施していること。
- ② 学生支援に関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

① 評価できる点（伸ばすべき点、取組が効果を上げている事項など）
<ul style="list-style-type: none">・ 補充教育等の学習支援を行うパワーアップセンターが設けられていることは教育のフォロー体制としてとても評価できる。・ 多様な学生に対して、状況に応じた手厚い学生支援を行おうという取り組みは評価できる。・ 経済的支援については、理工学部でも経済的な理由で就学に支障が生じた際の支援等安心できる取組を行っているが、日本は相対的にどんどん貧しくなっており、学びたい者が学べない、アルバイトをしなければならぬという状況は非常に問題だと感じている。経済的支援は本来、国の仕事と考えられるが、将来理工学部を卒業して社会に貢献できる活躍できる若い人たちに理工学部の取組を浸透させるためにどのように周知するかがすごく重要となるため、引き続き検討を行っていただきたい。・ キャリア支援については、理工学部でも1年次に大学の学びを考えるキャリアデザインがあるが、大学入学直後がやはり肝心だと感じる。大学入学時に、「卒業時に自分はどうなっていきたいのか？」という目標を決め、大学4年間をどのように過ごすかというのを最初にインプットすることが重要である。同動機づけを行った上で、未来博士工房の活動等を行うことで早い段階から就学意欲が高まることが期待できる。・ 闇バイトや違法薬物問題などが起きている時代であり、コンプライアンス教育の重要性が増しているため、既に行われているが、より一層の教育が重要となる。

② 問題点・今後の課題（改善すべき点、強化が望まれる事項など）
<ul style="list-style-type: none">・ 補充教育等の学習支援を行うパワーアップセンターは学生にとって活用するとその後の学生生活がより充実し、可能性を広げられるものと評価できるが、本当に必要としている学生へその情報が届くように運用方法を見直す必要があるのではないか。・ 社会人学生や留学生に対する支援に関しては学科を超えた取り組みとしてより充実されることが望ましい。・ カウンセリングを希望する学生に対して、カウンセリングの機会を提供することは大切な取組となるため、場所の確保が課題となっているようであれば、学内の固定的な場所の確保に加え、学外施設等を活用して、時間・場所・機会の充実に努めていただきたい。・ 理系大学の女性比率の低さは大きな課題であり、日本社会には女性発想のイノベーションも必要と感じる。そこで、理工学部としての数値/期日目標の設定を行う必要があるのではないか。・ 交換留学制度は良い制度だが、学部全体で2名は少なく、交換留学の成果が教育研究の観点から不明だったため、今後成果等を十分に検討する必要があるのではないか。・ 日本大学は不祥事等があり、学生や保護者はそれらにより学生生活に影響を及ぼすのではないかと不安に

感じるため、理工学部への対応や教育研究活動等を積極的に社会へ公表し、安心させることが大事ではないか。

- ・バリアフリー、ダイバーシティに対応できていない施設や、自習スペースが限られている印象が見受けられるので、今後計画的に施設が整備されることが望まれる。
- ・卒業生と学生の交流は学生の刺激と将来の方向性を考える良い機会になるので、学部として学外向け講演会やセミナーの活発化とPRを行っていくことが望まれる。

③報告書の記載内容に対する評価, コメント		ABCD 評価(※)
	・点検・評価項目ごとに現状を記載しているか。その内容は具体的か。	A
	・記述内容は適格かつ簡潔に記載されているか。冗長な文章となっていないか。	A
	・誤字や脱字, わかりにくい表現はないか。	A
コメント	・自己点検・評価報告書内に評価項目の内容が的確に整理されている。	

※ A：十分出来ている, B：概ね出来ている, C：一部改善が必要, D：出来ていない

[基準9] 社会連携・社会貢献

【評価項目】

- ① 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取組を実施していること。また、教育研究成果を適切に社会に還元していること。
- ② 社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

① 評価できる点（伸ばすべき点、取組が効果を上げている事項など）
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の自治体と包括連携協定を通じて、様々な取り組みが行われ、地域社会に貢献している姿がうかがえるのは評価できる。今後も学科の枠を超えて様々な分野においてボランティア・地域連携活動を行っていただきたい。 ・各学科、各教員が社会との連携（出張講義、公開イベント、地域連携活動等）を模索していることは評価される。 ・令和6年10月に理工学部船橋校舎で開催された「次世代工学・研究シーズ交流会～日大から発信する次世代工学～（共催：三井住友銀行/日本大学）」は社会から研究課題をもらい、それをフィードバックするというサイクルになっており、非常に良い取り組みと感じた。

② 問題点・今後の課題（改善すべき点、強化が望まれる事項など）
<ul style="list-style-type: none"> ・「社会との連携」は多数の卒業生が社会で活躍している理工学部の特徴を活かせる分野であるので、さらに理工学部全体として体系的にアピールすることが望ましい。 ・様々な取り組みを実施しているにも関わらず、メディアへの露出が少ない印象があるため、広報誌での発信やメディアへの情報提供に積極的に取り組んでいただきたい。 ・日本大学の技術士取得力は高く、そのような教育力をアピールするとともに、社会貢献としてより一層生かしていただきたい。

③報告書の記載内容に対する評価、コメント	ABCD 評価(※)
・点検・評価項目ごとに現状を記載しているか。その内容は具体的か。	A
・記述内容は適格かつ簡潔に記載されているか。冗長な文章となっていないか。	A
・誤字や脱字、わかりにくい表現はないか。	A
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright; background-color: #e0e0e0; padding: 5px; margin-right: 5px;">コメント</div> <div> <ul style="list-style-type: none"> ・大学の社会貢献の最たるものは、未来の社会に貢献する人物を育て上げることと考えられ、そこに対して一本筋が通っていることが大事である。ボランティアを行うとしてもただ活動するのではなく、学生自身の興味と学ぶ専門性の延長線上にある社会貢献に関するボランティア等を促進していくことが大事である。 ・究極の社会貢献は、地震・水害・津波などの自然災害の復興技術支援と考えられ、理工学部には土木工・建築・海洋建築工・まちづくり工学科等、さらに他学部には危機管理学部があるので、連携を行うことにより総合大学としての日本大学の底力を発揮できるのではないか。 ・社会貢献活動へ参加する学生に対する動機づけとして表彰等を与える制度を検討してはどうか。 </div> </div>	

※ A：十分出来ている， B：概ね出来ている， C：一部改善が必要， D：出来ていない